

◆京都府の気候変動（降水量）これから（高程度の温室効果ガスの排出が続く場合）

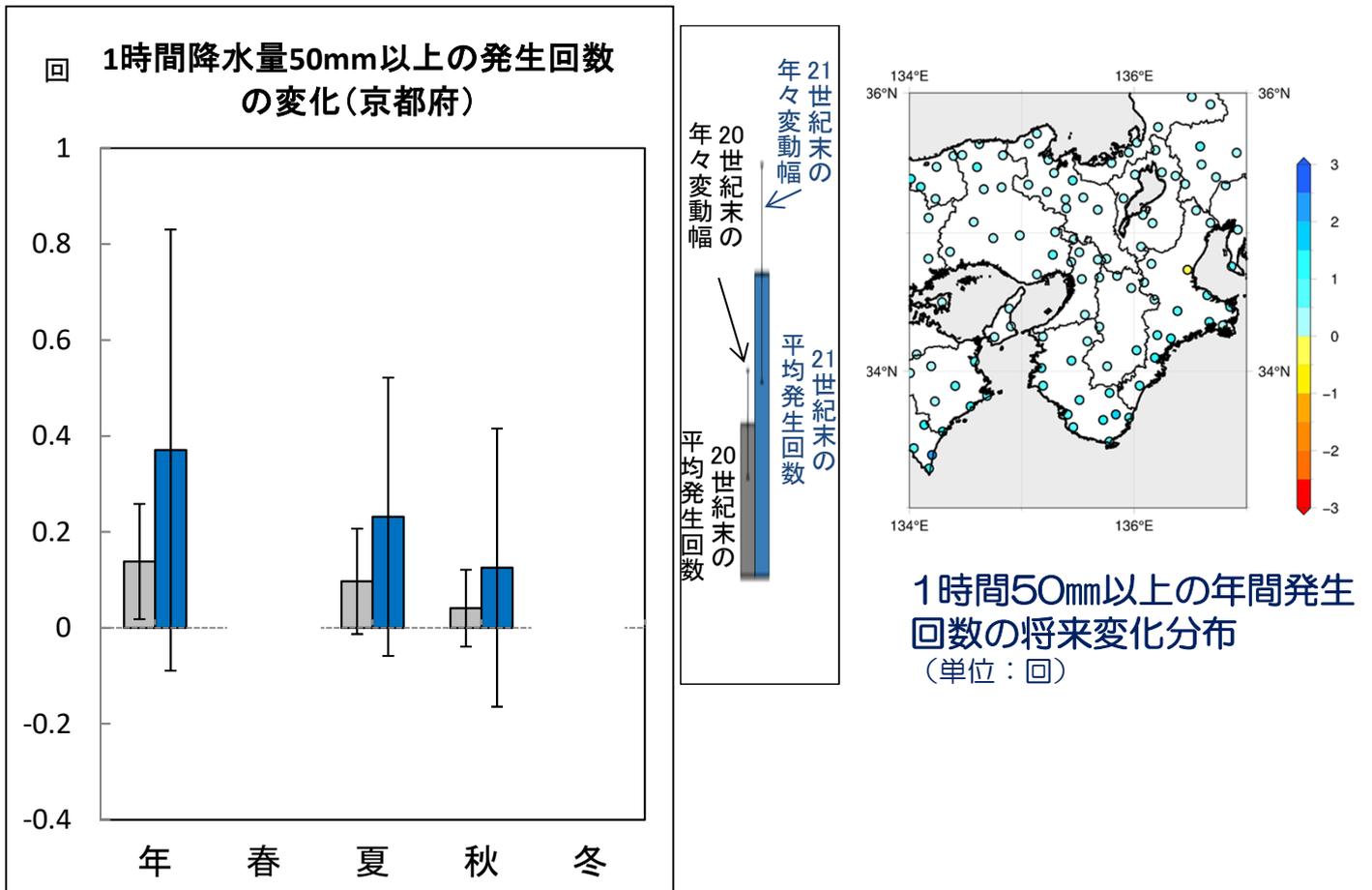
気象庁地球温暖化予測情報第9巻に基づき、1980～1999年を「現在気候」、2076～2095年を「将来気候」とし20世紀末から21世紀末の気候の変化を予測しました。

● 滝のように降る雨（1時間降水量50mm以上の短時間強雨）の

年間発生回数は、現在と比べて2倍以上増加。

⇒ 大雨による自然災害リスクの増大

※ 予測は、20世紀末(1980～1999年)の気候と比べた、21世紀末(2076～2095年)の気候。



京都府における1時間50mm以上の年間発生回数の変化
棒グラフは20世紀末（左側：灰色）及び21世紀末（右側：青色）における値、細い縦線は20世紀末及び21世紀末における年々変動の幅（標準偏差）。（単位：回）

※ 春と冬は発生回数が少ないため表示していません。

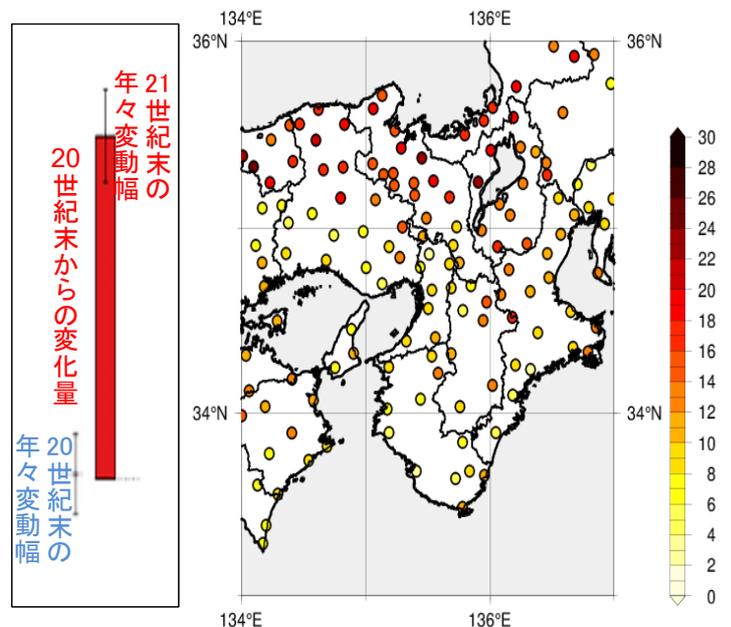
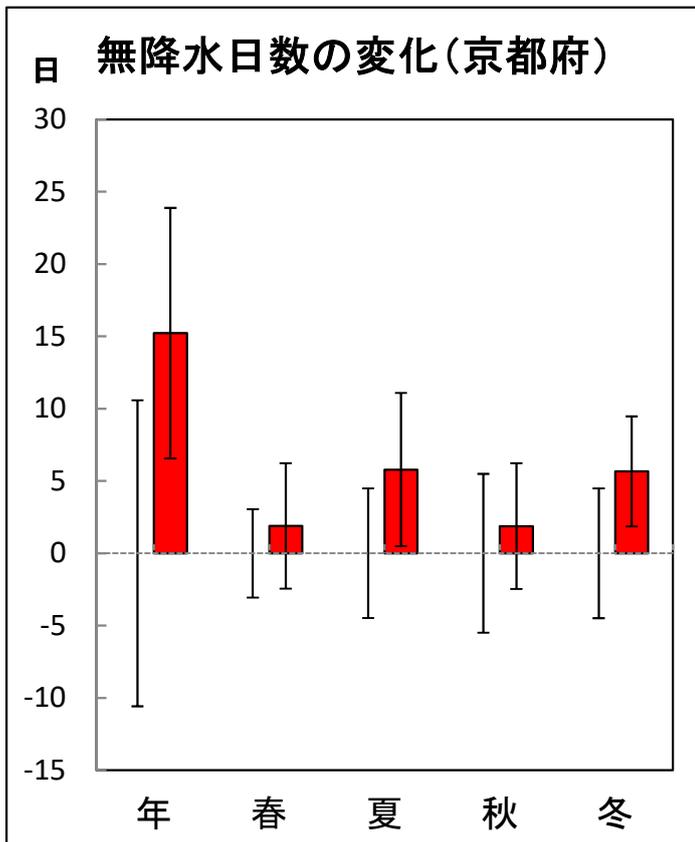
◆京都府の気候変動（降水量）これから（高程度の温室効果ガスの排出が続く場合）

気象庁地球温暖化予測情報第9巻に基づき、1980～1999年を「現在気候」、2076～2095年を「将来気候」とし20世紀末から21世紀末の気候の変化を予測しました。

- **雨の降らない日**（日降水量が1mm未満の日）の年間日数は、**増加し**、
年間で約15日程度増加。⇒ **干ばつリスクの増大**

※ 予測は、20世紀末(1980～1999年)の気候と比べた、21世紀末(2076～2095年)の気候。

※ 現在(1981～2010年観測値の平均値)の日降水量1mm未満の日の年間日数は、京都で261日。



雨の降らない日の年間日数の将来変化分布

京都府における雨の降らない日の将来変化

赤い棒グラフは21世紀末における平均の変化量、細い縦線は、20世紀末(左)及び21世紀末(右)における年による変動の幅(標準偏差)。(単位:日)